

〈論文〉

ふたつの“ハガレン”
—アニメ『鋼の錬金術師』にみる物語の相補的構造—

川村清志

1 はじめに

本稿は、“ハガレン”と通称される『鋼の錬金術師』のふたつのアニメーションを検証し、そこに表出された物語構造の特質とその差異について論じる。

アニメや漫画が、メディア研究、文化研究の枠組みで研究されて久しい。とりわけ日本のアニメーションについては、ジャパニメーションという造語さえ生み出され、日本国内はいうにおよばず、その消費地である欧米でも、多くの研究がおこなわれつつある〔ネイピア2002、山里2004、津堅2005、アスリン2010〕。これらの研究の展開は、文化研究の関心が生産から消費へとシフトしてきたこととも軌を一にしているのかもしれない。

『鋼の錬金術師』は、2001年の8月から荒川弘が『月刊少年ガンガン』で連載を開始した漫画を原作としている。漫画版の『鋼の錬金術師』（以後、“ハガレン”という通称を用いる）は、2010年の7月号まで掲載され、全27巻、108話をもって完結した。累計出版部数は5000万部を突破したとされ、小学館漫画賞などの各章にも輝いている。

この漫画は、これまで2回にわたってアニメ化されている。第一期は、2003年の10月から1年にわたって全51話が、第二期は2009年の4月から2010年6月まで全63話が放映された（表1）。〈一期〉は水島精二が監督となり、〈二期〉は入江泰浩が担当している。

“ハガレン”をめぐるのは、ユリイカで完結記念の特集号が組まれたのをはじめとして多くの議論が行われている〔馬場2005、荒川他2010〕。ただその多くは、原作と原作に比較的忠実な〈二期〉のアニメーションについて論じられることが多かった。そのなかにおいて本論では、これまであまり議論されていない〈一期〉と〈二期〉のアニメを比較検証す

ることで、両者の相補的な構造を浮かびあがらせることにしたい¹。そして、その作業を通じて、現代のアニメーションという物語の構造的な特質を明らかにする糸口としていきたいと考える。

2 物語の概要

2-1 “ハガレン”の世界

物語は、錬金術が活用される異世界を舞台としている。その世界で錬金術は「物質の構造を理解し、分解し、再構築する科学技術である」²と規定される。この基本設定は原作漫画やふたつのアニメーションでも共有されている。

錬金術では、錬成陣と呼ばれる円形を基礎とした構築式を組み立てる。錬成陣は「力の循環と時間の循環」を表し、そこに術者のエネルギーを投下することによって特定の効果が発動する。鉄のかたまりから武器や道具を作り出したり、空気中の酸素を操作して、高温の焔を出現させたりすることもできる。このような設定は、作者自身も認めているように歴史上の錬金術の概念とは大きく異なっている。錬金術は、決して厳密な合理性に支えられているものではない。ただ“ハガレン”における「錬金術」は、このファンタジーの世界観に深く関与している。その体系的な叙述は、物語空間のフレームを形成する役割も果たしている。

実際、この世界の錬金術では、いくつかのキーワードが示されることになる。その一つは、「等価交換」である。質量が一のものからは一しか作ることができず、水と鉄のようにある物質を異なった性質の物質に錬成し直すこともできない。また、錬成の禁忌とされる事柄も設定されている。その一つは金を錬成することである。これは主に経済的な混乱を招くためであるらしい。また、錬金術では決して生きた人間を錬成してもいけない。ただし物語の序盤では、ホムンクルスという人工的に造られた人間についても言及されており、後のエピソードへの伏線となっている。

¹ 例外的にアニメ評論家の藤津亮太が、〈一期〉と〈二期〉のアニメについての比較を行っている。彼の議論は主に原作とアニメーションとの関係と、そこでの物語の構成と演出の仕方について、両者を比較している [藤津 2010]。

² 原作の2巻では、「錬金術とは物質の内に存在する法則と流れを知り、分解し、再構築する事」[FA2 75] という言葉が兄弟の師匠の言葉として使われている。同様の意味の言葉は「等価交換」についての説明と同様に〈一期〉、〈二期〉の両方で頻出する。なお、本稿において原作からの引用は [FA 巻数 頁] として、また、アニメから [期別 話数] で紹介している。

物語の発端は、取り返しのつかない喪失からはじまる。二人の主人公、エドワード・エルリック（以下エド）とアルフォンス・エルリック（以下アル）の兄弟は、病死した母、トリシャを蘇らせるために人体錬成の禁忌をおかす。だが、彼らは錬成に失敗し、エドは左脚を、アルは自らの身体全てを失う。兄のエドは自身の右腕を代価として、アルの魂を鎧に定着させたが、トリシャはついに蘇ることはなかった。

二人は、心と身体に大きな傷をおうとともに、自らにとって「母」がかけがえのない存在であり、錬成によって造り出せるものではないことを悟る（後にそれは、存在しないものを錬成することはできないという錬金術的な説明が行われることになる）。

ここから物語は、エルリック兄弟が、自らの失った身体を取り戻す旅の過程として描かれることになる。エドは、幼なじみであるウィンリィ・ロックベルとその祖母ピナコ・ロックベルに、機械鎧（オートメイル）と呼ばれる鋼の義手と義足を身につけてもらう。彼は1年間のリハビリを終えたのち、国家錬金術師の試験を受けるために故郷のリゼンプールをあとにする。エドは史上最年少で国家錬金術師に合格し、二つ名である「鋼」を授けられる。彼らが住むアメストリスは軍事国家であり、国家錬金術師はその技術を軍事力に転用するためにもうけられた制度であった。

彼らの目的は、国家錬金術師になることで、通常では閲覧不可能な錬金術の資料にも触れる機会をえることだった。そして、錬金術の法則を超えて作用する術増幅器「賢者の石」を探し出して、自らの体を取り戻そうとしたのである。しかし、紛争の絶えないアメストリスで兄弟たちは、必然的に紛争の調停に加担せざるをえず、人々から「軍の狗」と呼ばれることにもなる。

2-2 ^{キャラクター} 主な登場人物

この物語の主人公は、言うまでもなくエルリック兄弟である。彼らの脇を固める存在として、兄弟を庇護する軍部の若き精鋭たち、ロイ・マスタング大佐とその部下たち、マス・ヒューズ中佐、アレックス・ルイ・アームストロング少佐らが登場する。

マスタングは国民、大衆のために錬金術を用いることを志し、国軍に入るとともに国家錬金術師となった。だが、イシュヴァールの殲滅戦に参加することで、命令のままに「自国民」を殲滅しなければならない自らの無力さを痛感する。彼はその経験を通して、より多くの人を守る力をえるため、大総統への道を歩むことを決意していた。原作では、彼は部下たちに次のように語っている。「私は非力な人間だ。それ故に全てを守るには君達の協力が必要だ。私が君達の命を守る。君達はその手で守れる数だけ・・・わずかでいい、下の者を守れ。その下の者は更に下の者を守るだろう」[FA15 173]。

彼の士官学校時代から友人であり、マスタングの大総統への道をバックアップするのが、ヒューズ中佐である。彼は愛妻家で子煩悩として描かれる一方で、軍法会議所の切れ者として兄弟やマスタングに助言を与える立場にあった。しかし、後に彼は、その明晰すぎる頭脳のために、命を落とすことになる。アームストロング少佐は、「豪腕」の二つ名をもつ国家錬金術師でもある。筋肉美を誇る一方で、情に厚く涙もろい性格が、兄弟とのエピソードで示される。彼は、マスタングやヒューズと連携しながら兄弟たちを支えることになる。

兄弟の心身を支える存在として、故郷のリゼンブルでオートメイル工房を構えるウィンリイ・ロックベルとその祖母、ピナコ・ロックベルがいる。ウィンリイは兄弟の幼なじみであるだけでなく、手足を失ったエンドにオートメイルを装着した職人でもある。彼女は、エルリック兄弟が幼い頃に「どっちがウィンリイをお嫁さんにするかで喧嘩」[II 9] するような存在であり、本来的にこの物語のヒロインである。また、彼女には、幼い頃に医者である両親を、イシュヴァール内戦で亡くした過去がある。

兄弟の師匠であるイズミ・カーティスとその夫も兄弟を支え、導く存在として登場する。原作では、5巻で登場するイズミだが、それ以前から兄弟の言動や回想において、恐怖と畏敬の対象として描写されていた。彼女は、徹底したスパルタ式で兄弟たちに錬金術に関わる技能を教授していた。ただし彼女も、人体錬成を行ったために内臓のあちこちを失ったことが、後に明らかになる。流産した自らの子どもを蘇らせようとして、錬金術の禁忌を犯していたのである。彼女は、自らの罪を背負いつつ、同じ罪を背負う兄弟を抱きとめ、支える存在でもあった。

ところで、兄弟の父親であるヴァン・ホーエンハイムは兄弟が幼い頃に旅立ったまま、戻ってこなかった。原作のエンドの回想でも「親らしい事をしてもらったという記憶は全くと言っていい程無い」[FA5 117] と語られているように、彼が父を嫌っていたことは随所に示されている。ただホーエンハイムが錬金術師だったため、家には多くの錬金術関係の書籍が残されていた。兄弟たちは、それらから錬金術の基礎を学んでいった。彼はふたつのアニメの両方で後半部に姿を現すが、その役回りは、〈一期〉と〈二期〉で大きく異なる。ただ共通しているのは、彼が兄弟に敵対する者と深いつながりがあるということである。

エルリック兄弟の前に立ちはだかり、様々な策謀をこらす存在が登場する。後に彼らは、ホムンクルス、すなわち人工的に造り出された「人間」であることが明らかになる。ホムンクルスには西洋の七つの大罪の名が割り当てられている。すなわち、ラスト（色欲）、エンヴィー（嫉妬）、グラトニー（暴食）、グリード（強欲）、ラース（憤怒）、スロウス（怠惰）、

プライド（傲慢）である。彼らは兄弟が関わる事件の背後で暗躍し、しばしば彼らの行く手を阻むことになる。彼らの体のどこかには、必ずウロボロスの刻印が記されている。

さらに兄弟と当初は激しく敵対するのが、アメストリスの少数民族であるイシュヴァール人のスカー（傷の男）である。彼は、かつて国軍によるイシュヴァール殲滅戦の生き残りだった。スカーは制圧を主導した国家錬金術師への復讐をおこなっていた。このイシュヴァール内乱は、後に国家的な陰謀によって企てられたことが明らかになっていく。

2-3 序盤の物語

以上のような物語の基本設定は同じだが、〈一期〉のアニメは原作を追い越す形で進出したため、物語の中盤以降は、原作や〈二期〉とは全く異なったストーリーが展開することになる。実際、〈一期〉がテレビで放映された時点では、原作はまだ、6巻までしか刊行されていなかった（原作は最終的には27巻の長編である。）

それでもふたつのアニメ作品で、原作をベースとした序盤のエピソードは共有されている。まず、二人が母の人体錬成を行おうとしたことと、リオールでロト教の教祖の陰謀を暴いた物語が描かれる。「緞命」の錬金術師、シヨウ・タッカーが自らの娘をキメラ（合成獣）に錬成する事件と、国家錬金術師をつけ狙うスカーとの戦いがこれに続く³。

原作に登場するホムンクルスたちの陰謀に気付きかけたヒューズ中佐が、その一人、エンヴィーに殺害される事件も、多少のニュアンスの違いはあるものの、序盤のヤマとして描きだされる。また、強欲のホムンクルス、グリードがアルフォンスの魂の錬成の秘密を知ろうとして拉致する事件も、その前半部の展開は両者で共通する（表1参照）。

けれども、ヒューズの事件もグリードの事件も後半の展開や、そこに関与する登場人物は、ふたつの物語の間で徐々に相違していく。いくつかのエピソードが挿入され、オリジナルのキャラクターが登場することで、ふたつの物語はさらに分岐していくことになるだろう。次に、これらふたつの“ハガレン”における登場人物の差異を示したうえで、分岐していった物語のアウトラインを紹介していきたい。

³ 本文で記したように〈一期〉はオリジナルな物語が進出し、〈二期〉が原作に忠実であることは間違いない。ただしこの序盤においては、「原作」と〈一期〉では共有されるが、〈二期〉では省略されたと思われるエピソードがある。過激派にジャックされた列車からハクロ少将とその家族をエドたちが救出するエピソードや、東部のユースウェル鉱山で汚職を働くヨキ中尉を、錬金術で詐術にかけるエピソードなどがそれにあたる。ただ本文でも記したように後にヨキ中尉は、スカーと行動をとるようになり、物語の終盤まで登場することになる。

表1 〈一期〉と〈二期〉の話数、サブタイトル、相関性

〈一期〉		〈二期〉			
話数	サブタイトル	話数	サブタイトル	話数	サブタイトル
1	太陽に挑む者	1	鋼の錬金術師	52	みんなの力
2	禁忌の身体	2	はじまりの日	53	復讐の炎
3	おかあさん…	3	邪教の街	54	烈火の先に
4	愛の錬成	4	錬金術師の苦悩	55	大人たちの生き様
5	疾走！機械鎧(オートメイル)	5	哀しみの雨	56	大總統の帰還
6	国家錬金術師資格試験	6	希望の道	57	永遠の眠
7	合成獣(キメラ)が哭く夜	7	隠された真実	58	ひとばしら
8	賢者の石	8	第五研究所	59	失われた光
9	軍の狗(いぬ)の銀時計	9	創られた想い	60	天の瞳、地の扉
10	怪盗サイレーン	10	それぞれの行く先	61	神を呑みこみし者
11	砂礫の大地・前編	11	ラッシュバレーの奇跡	62	凄絶なる反撃
12	砂礫の大地・後編	12	一は全、全は一	63	扉の向こう側
13	焔 vs 鋼	13	ダブリスの獣たち	64	旅路の涯
14	破壊の右手	14	地下にひそむ者たち		
15	イッシュヴァール虐殺	15	東方の使者		
16	失われたもの	16	戦友(とも)の足跡		
17	家族の待つ家	17	冷徹な焔		
18	マルコー・ノート	18	小さな人間の傲慢な掌		
19	真実の奥の奥	19	死なざる者の死		
20	守護者の魂	20	墓前の父		
21	紅い輝き	21	患者の前進		
22	造られた人間	22	遠くの背中		
23	鋼のころ	23	戦場(いくさば)の少女		
24	思い出の定着	24	腹の中		
25	別れの儀式	25	闇の扉		
26	彼女の理由	26	再会		
27	せんせい	27	狭間の宴		
28	一は全、全は一	28	おとうさま		
29	汚れなき子ども	29	患者の足掻き		
30	南方司令部襲撃	30	イッシュヴァール殲滅戦		
31	罪	31	520 センズの約束		
32	深い森のダンテ	32	大總統の息子		
33	囚われたアル	33	ブリッグズの北壁		
34	強欲の理論	34	氷の女王		
35	患者の再会	35	この国のかたち		
36	我が内なる科人(トガビト)	36	家族の肖像		
37	焔の錬金術師 戦う少尉さん 第十三倉庫の怪	37	始まりの人造人間(ホムンクルス)		
38	川の流れに	38	バズクルの激闘		
39	東方内戦	39	白昼の夢		
40	傷痕	40	フラスコの中の小人 (ホムンクルス)		
41	聖母	41	奈落		
42	彼の名を知らず	42	反撃の兆し		
43	野良犬は逃げ出した	43	蠶のひと噛み		
44	光のホーエンハイム	44	バリンバリンの全開		
45	心を劣化させるもの	45	約束の日		
46	人体錬成	46	迫る影		
47	ホムンクルス封印	47	闇の使者		
48	さようなら	48	地下道の誓い		
49	扉の向こうへ	49	親子の情		
50	死	50	セントラル動乱		
51	ミュンヘン 1921	51	不死の軍団		

3 分岐する物語

3-1 〈一期〉の登場人物

この節では、原作や続く〈二期〉には登場しなかったり、別の役回りを演じたりするキャラクターを紹介する。まず、〈一期〉のアニメーションでは、暗躍していたホームクルスたちの陣容が異なる。

グラマラスな女性の姿をしながら、「最強の矛」と呼ばれる硬質化させた手の指を伸縮させて武器とするラスト、常に腹を空かせ、全てのものを食べつくすグラトニー、変身能力をもつエンヴィーまでは、原作や〈二期〉と共通している。また、彼らとは行動を別にしていたグリードについても、その容姿や能力（最強の盾）に大きな異同はない。

けれども、彼（女）らについても、その背景について〈一期〉独特の設定が施されている。まず、ラストは、かつてイシュヴァール人であり、スカーの兄が錬成した恋人の記憶を宿していることが明らかになる。また、エンヴィーは、エルリック兄弟の父親であるホーエンハイムの最初の子どもであった。水銀中毒で亡くなったため、ホーエンハイムが人体錬成した存在であった。後にホーエンハイムがエンヴィーのもとを離れたために、自分は捨てられたと感じ、深く憎むようになる。彼はエドたちの腹違いの兄弟であったわけである。

さらに残りの三人も、冠される名前が異なったり、存在そのものが異なっていたりする。まず、軍の大総統であるキング・ブラッドレイが、実はホームクルスであるという設定までは共通している。しかし、彼のホームクルスとしての名は、〈一期〉ではプライドだが、〈二期〉と原作ではラスと記される。そのかわりに〈一期〉では、長髪の少年のホームクルスがラスの名で登場する。ラスはエルリック兄弟の師匠であるイズミ・カーティスが、死産した息子を錬成しようとして仕損なった存在であった。また、スロウスは、エドたちが錬成に失敗したホームクルスに付けられた名となる。彼女は、後に兄弟の母と瓜二つの姿で登場し、彼らを苦しめることになる。

このように〈一期〉に登場するホームクルスの多くは、人体錬成の失敗作であり、彼らの多くは、本当の人間になることを望む存在であると位置づけられる。彼らは、「賢者の石」の未完成品である「赤い石」を体内に蓄積することで、その容姿と不死身に近い肉体を身につけている。その一方で、彼らに付与された「名」は、〈一期〉では、あまり意味をなしていない。原作に近い設定のグリードが、自らの台詞を通して強欲さが強調されたり、グラトニーの大食漢ぶりが描かれたりしているが、それ以外のホームクルスの属性は、必ずしも名前とは一致しているようにはみえない。

これらのホームクルスを使役する黒幕として登場するのが、ダンテという錬金術師であ

る。彼女は、最初、イズミの師匠として兄弟の前に現れる。深い森の奥で隠者のような生活を送り、穏やかで温厚そうな老女の姿をしている。しかし、やがて彼女こそホームクルスたちを背後から操る陰の存在であることが明らかになる。彼女は、物語より約400年前に兄弟の父親であるホーエンハイムとともに「賢者の石」を作り出した存在でもあった。

これ以外に何人か、原作や〈二期〉と共通したキャラクターが、敵味方双方で登場する。例えば「結晶」の錬金術師ティム・マルコーは、兄弟に「賢者の石」の真実を示唆した存在である。彼はイシュヴァール殲滅戦のなかで、「赤い石」の練成を強要された経験がトラウマとなり、隠遁生活を送っていた。それに対して「紅蓮」の錬金術師、ゾルフ・J・キンブリーは、同じくイシュヴァール殲滅戦の最中、将校たちを殺傷した罪で収監されていた。しかし、紆余曲折の末に軍部に復帰し、兄弟の前に立ちはだかることになる。

ただ、これら以外に〈一期〉の主要なキャラクターはあまり多くはない。軍部では、マスタングのライバルとなるフランク・アーチャーが登場するくらいである。彼は功名心に駆られ、ホームクルスたちの野望を知らぬまま、エルリック兄弟の行く手を阻むことに加担する。

〈一期〉ではそれ以外に、物語の前半に登場した何人かのキャラクターが、違った役回りで再登場することになる。例えば、ショウ・タッカーは、物語の中盤でグリードの仲間として再登場する。その時の彼は、練成の失敗でキメラの姿に成り果てていた。また、序盤のエピソードであるユースウェル鉱山のヨキのもとで雇われていた錬金術師ライラは、後にダンテの助手として再登場する。彼女自身はダンテのもとで、錬金術を学びなおすことに喜びを感じていたようである。だが、彼女は、さらにもう一つ別の重要な役割を果たすことになる。

だが、何よりも重要な役回りを演じるのは、一話で登場したロゼ・トーマスである。彼女はリオールの反乱のおり、国軍に襲われて暴行をうけ、子どもをもうけていた。暴行によるトラウマのために、エドと再会したときには声も失っていた。スカーたちは、彼女を「聖母」として宗教的なシンボルに位置づけ、軍に対する反攻の拠点としていく。

3-2 〈一期〉の物語

〈一期〉は3話から9話までを兄弟の幼少期の経験として、上記のエピソードを挿入しながら再構成している。

しかし、エンヴィーによるヒューズ暗殺以後、物語は緊迫の度合いを増していく。兄弟は、軍の陰謀の痕跡を追いかけ、スカーやホームクルスと戦うなかで、「賢者の石」が大量の人間の命を原料にして生成されることを知る。エドは、自分たちの体を取り戻すため

に、他人を犠牲にして「賢者の石」を錬成する誘惑にも駆られる。だが、ぎりぎりの選択として彼らは、「賢者の石」に頼らないで身体を取り戻す方法を求め続けることになる。

切迫した状況のなかで、すでに述べたダンテが登場するとともに、ホムンクルスたちの陣容も整っていく。ダンテの真の目的は、ホムンクルスたちを使って優秀な錬金術師を探し出し、「賢者の石」を作らせることにあった。ホムンクルスたちは錬金術師たちに試練を与えて絶望的な経験をさせる。その経験を通して奇跡をもたらすとされる「賢者の石」を作るように仕向けていたのである。ダンテは、かつてホーエンハイムが作り出した「賢者の石」を用いて魂の錬成を行い、自らの魂を別の体に定着させることで長い時を生き続けてきた。

物語の後半でスカーは、国軍を罠に陥れて「賢者の石」を錬成することになる。彼はリオールで暴動を煽動し、国軍を街全体に張り巡らした錬成陣のなかに誘い込もうとしていた。彼の復讐行は、イシュヴァールの民をはじめとする虐げられた人びとの解放を求める戦いへと拡大していく。一方、ホムンクルスであるブラッドレイは、その罠に気づきながらも「賢者の石」錬成のため、あえて多くの国軍兵士を犠牲にしようとする。

悲劇を防ぐためにエドは、リオールの街に潜入する。彼はそこでスカーをはじめ、ダンテのもとにいたライラ、そして、幼子を抱いたロゼ・トーマスと再会する。「賢者の石」の錬成を止めようとするエドだったが、スカーからロゼに起きた悲劇を知らされて逡巡する。同じくリオールに潜入したアルは、市民を惨殺する「紅蓮」の錬金術師、キンブリーと戦うことになる。彼はスカーと共闘することでキンブリーを倒すものの、自らの体を爆発物に変えられてしまう。しかし、兄弟の思いを自らに重ねあわせたスカーは、自分の右腕の錬成陣を操作してアルの身体を「賢者の石」に錬成しなおす。

そこに国軍が突入し、ついに街全体に張り巡らされた錬成陣が発動する。国軍は消え去り、あとには、賢者の石をその身に宿したアルだけが残っていた。その結果、ホムンクルスたちは、アルの身体をねらって誘拐し、それを追ってエドは、最後の戦いの場に導かれることになる。それは400年前に「賢者の石」錬成のために一夜にして消え去り、セントラルの地下深くに封印された都市の廃墟だった。

廃墟の都市にはライラとロゼ、ホムンクルスのエンヴィー、グラトニー、ラーズたちがいた。ライラこそ、「賢者の石」によって自らの魂を移し替えたダンテ本人だったのである。彼女は、すでにホーエンハイムを「扉」の向こうへと追いやっていた。だが、彼女自身も転生を繰り返すうちに魂が劣化しており、新しいライラの体も腐敗が進行していた。彼女はアルの「賢者の石」を用いて、ロゼの体をのっとりともくろむ。

また、ブラッドレイがホムンクルスであることを知ったマスタングたちは、国家の刷新

のためにブラッドレイの暗殺を執行しようとしていた。彼らは、手薄となったブラッドレイ邸に乗り込み、マスタングは国家の父たる大総統と雌雄を決する。だが、戦闘力に上回る大総統は、マスタングを追いつめる。

一方、エドは、一度はダンテたちとの戦いにやぶれ、「真理の扉」の向こう側に飛ばされることになる。「扉」の向こう側とは、錬金術が存在しないかわりに航空技術などの自然科学が発達した世界、つまり、この「現実」の世界だった——その世界は、第一次世界大戦中の「イギリス」として描かれている。彼は、すでにそちらの世界にとばされていた父、ホーエンハイムと再会し、錬金術の恐るべき事実を知る。

それまでの世界で錬金術を発動させる際の膨大なエネルギーは、「扉」を通じて、この現実の世界から流れ込んでくる人々の命のエネルギーそのものだった。兄弟たちが絶対の真理と信じていた「等価交換の法則」とは、異世界の生命エネルギーが介在（犠牲に）して初めて成立する「法則」だったのである。

不本意ながらも他者の命——別の世界は平行宇宙のような設定になっており、エドとそっくりの少年がいた——によってもう一度、元の世界に戻ってきたエドは、ダンテたちとの戦いを切り抜け、アルを蘇らせるために持てる全ての力を使って錬成を行う。その結果、アルは元の身体をとり戻すかわりに、身体を失って以後の旅の記憶を全て失った。エドは再び異世界である「現実」界にとばされて、父とともに生活を送ることになる。

3-3 〈二期〉の登場人物

さて、〈二期〉には、中盤以後、多くのキャラクターが登場する。すでに述べたホームクルスの陣容から紹介しよう。〈二期〉のラスは、すでに述べた通り、大総統のキング・ブラッドレイである。彼は、幼少時から大総統候補生として集められ、養成された普通の人間だった。成人後に彼は、「賢者の石」を注入されることでホームクルスとなり、キング・ブラッドレイの名もその時に与えられている。眼帯をした左目にはウロボロスの刻印があり、その「目」によって卓越した戦闘力を有している。ただし、彼には魂が一つしかないため、他のホームクルスのような再生能力はない。

次にスロウスは、アメストリスの国家の外延の地下を掘り続け、国土錬成陣を作る巨漢として登場する。「面倒くさい」が口癖のこのホームクルスは、確かに「怠惰」を地でいくホームクルスである。だが、実際には、ホームクルスのなかで最速を誇る存在であり、後にアームストロング姉弟を苦しめることになる。さらにプライドは、キング・ブラッドレイの養子とされるセリム・ブラッドレイであった。「鋼の錬金術師」に憧れるいたいけな少年は、最初のホームクルスにして、他のホームクルスを統括する存在であった。人間

に対する尊大な振る舞いと物言いは、外見とは裏腹に「傲慢」そのものである（表2参照）。

また、この〈二期〉では、兄弟が対峙しなければならない最後の敵が全く異なっている。〈二期〉ないしは原作において登場するのは、エドたちの父、ヴァン・ホーエンハイムと瓜二つで、ホムンクルスたちが「お父様」と呼ぶ存在である。彼はアメストリスの中央の地下深くに住まい、ホムンクルスたちを指揮するだけでなく、国家の中枢をも掌握している。

この「お父様」もまた、数百年前に東方の大砂漠の中に消えたクセルクセスの王国で生成されたホムンクルスであった。その当初の姿から彼は、「ビンの中の小人」とも呼ばれた。「ビンの中の小人」はクセルクセス王の不死の欲望につけ込んだ。彼らを唆して国民の魂を用いて「賢者の石」を錬成し、自らの身体と不死に近い命を獲得したのである。その際に兄弟の父、ホーエンハイムは錬成に巻き込まれてしまう。ホムンクルスは、ホーエンハイムの身体の組成を利用して、自らの容れ物にくたいを構築した。その結果、ホムンクルスはホーエンハイムと瓜二つの姿となり、他方でホーエンハイムは自らの身体を「賢者の石」とされてしまったのである。

これ以外に〈二期〉では、物語の舞台となるアメストリスの外部からの登場人物が現れる。なかでも重要な役割を果たすのが、東方の大国、シンからやってきたリン・ヤオとメイ・チャンである。彼（女）らは、いずれもシン国の少数民族の出身であり、皇帝の血を引いている。不老不死をもたらすという「賢者の石」を求めてアメストリスに潜入してきた。それをシンの皇帝に献上することで、自らの民族の地位を向上させることが両者の真の目的だった。

軍の内部にも重要なキャラクターが登場する。ルイ・アームストロング少佐の姉、オリヴィエ・ミラ・アームストロング少将と彼女が率いるブリッグズの精鋭たちである。彼女らは、北の大国ドラクマと国境を接するブリッグズ要塞の警備に当たっている。アームストロング家の長子にあたるオリヴィエは、金髪でストレートの長髪と官能的な厚ぼったい唇が特徴の美女とされる。しかし、その性格は、果敢にして苛烈、弱肉強食に基づいた実力至上主義を貫く合理主義者である。また、彼の副官であるマイルズは、イシュヴァールの血を引くクォーターである。彼の存在に象徴されるように、オリヴィエの実力主義の背後には、民族や文化を超えた一貫した平等性が示唆されている。同時に彼のような存在が「多様な価値観」を示すものと位置づけられ、多文化主義とナショナリズムの併存を示すキャラクターともいえる。

また、〈二期〉では、レイブン中將をはじめとした多くの軍の幹部が登場するが、彼らの多くが、「お父様」に与していることも後に明らかになる。そのなかで数少ないマスタングの協力者が、グラマン中將である。彼は、マスタングが東方司令部に勤務していた頃

表2. ホムンクルスの異同

	<一期>	<二期>
エンヴィー	・変身能力をもつ。ホーエンハイムが事故で死んだ子どもを錬成しようとして生まれた存在。物語の最後は「竜」のような姿になる。	・「お父さま」が作り出した存在で、変身能力を持つ。真の姿は全身にクセルクセス人の魂を宿し、巨大な恐竜のような姿をしている。
ラスト	・イシュバル人（スカーの兄）の人体錬成によって作られる。記憶を取り戻したことで兄弟に加担し、スロウスに殺される。	・「お父さま」によって作られる。「最強の鎧」と呼ばれていたが、ロイ・マスタングとの戦いにやぶれて消滅する。
グラトニー	・大食漢で、人間も食べる。賢者の石の錬成のためにダンテによって作られる。	・「お父さま」が真理の扉を作ろうして失敗した存在であり、彼の腹には、異世界への扉がある。
グリード	・ダンテによって作られたと考えられる。「最高の盾」を持つが、彼のオリジナルの身体はダンテがっており、それを見たために身体が硬直し、最後はエドに倒される。	・「お父さま」に創られたが、過去に出奔した。キング・ブラッドレイに倒され、「お父さま」に消去される。後にリン・ヤオの身体を乗っ取って復活するが、過去のグリードの記憶は断片的にしかない。
ラーズ	・エルリック兄弟の師であるイズミ・カーティスが死産した自らの息子を錬成しようとして失敗した存在。少年の姿で、彼の腕と足はエドワードのものである。	・大総統の候補として選抜された若者（後のキング・ブラッドレイ）に賢者の石が注入されてホムンクルスとなった存在。
プライド	・大総統キング・ブラッドレイをあらわす。ホムンクルスでありながら、外見は年齢相応に老いていくという設定。ダンテに錬成された存在である。	・普段は、キング・ブラッドレイの息子、セリム・ブラッドレイの姿をしている。「お父さま」によって最初に創られた存在であり、ホムンクルスたちを統括する。
スロウス	・エルリック兄弟が、母を錬成しようとして失敗した存在。兄弟の母にそっくりな姿だが、全身を液体化して敵を殺傷する能力をもつ。	・アメストリスの外延を掘り進む巨漢の姿。鈍重そうに見えるが、ホムンクルスのなかで最速である。アームストロング姉弟によって倒される。

の上司であった。セントラルの陰謀を知るに至り、マスタングとともにクーデターを起こすことを決意する。

やや興味深いのは、〈一期〉では、物語のなかばで命を落とした何人かのキャラクターが、それぞれの役割を果たしている点である。例えば、鉱山を汚職で追われたヨキは、〈一期〉では難民の蜂起を画策するホムンクルスの手にかかって死亡していた。しかし、〈二期〉では、スカーとともに国土練成陣の謎をさぐる旅をすることになる。同じく〈一期〉で命を落としていたティム・マルコーも、スカーと行動を共にし、「お父様」を倒す「逆転の練成陣」を構築する役割を担うことになる。さらにスカー自身も、最後の戦いを生き抜き、イシュヴァールの復興に尽力することを誓うことになる⁴。

3-4 〈二期〉の物語

〈二期〉ならびに原作では、物語の中盤以後、「賢者の石」に関わる事件に軍が深く関与していることが明らかになる。兄弟たちはそれらの事件をくぐり抜けるなかで、徐々に真実、あるいは国家的な陰謀に気づいていく。ちなみにこの〈二期〉では、最終的な物語の帰結は「賢者の石」ではない。「賢者の石」は、すでに物語の中盤以降に何度も登場する。さらにホムンクルスたちの核自体が、「賢者の石」であることも明らかになる。彼らは、いずれも「お父様」が自らの意識に宿る人間的な要素を分離して、創造したものであった。その意味で彼らは、「お父様」の「子ども」であり分身でもあった。

ヒューズの事件のあとで物語の舞台は、アメストリスの東部の町を超えて広がる大砂漠に移る。エドは、砂漠のなかに残るクセルクセス遺跡で、ヒューズ殺害の容疑でマスタングに焼き殺されたと思われていたマリア・ロス少尉に再会する。マスタングは、ダミーを使って焼死体を作り、ロス本人が国外に逃亡できるように取りはからっていた。エドは彼女との再会と無事を喜ぶと同時に、その遺跡に秘められた謎に注意を喚起することになる。また、この東の砂漠からは、すでに述べたシン帝国の王子や王女が不老不死の法を求めてやってきていた。

このシンだけでなく、〈二期〉ではアメストリスという軍事国家とそれを取り巻く周辺諸国の存在が言及される。アメストリスの北方には峻険なブリッグズ山脈がそびえ、その先には大国ドラクマが控える。ドラクマとは不可侵条約が結ばれているものの、いつ紛争

⁴ ちなみに「紅蓮」の錬金術師キンブリーは、アルとの戦いに敗れて命を落とすところは〈一期〉と変わらない。しかし、彼はホムンクルスのプライドに取り込まれても自我を保ち続け、物語の終局で重要な役回りを演じることにもなる。

が起きてもおかしくない状況が続いていた。国の南方にはアエルゴが、西方にはクレタが位置し、いずれの国境付近でも小競り合いが絶えない。こうして〈二期〉では、アメストリスの外延だけでなく、その外側の環境や国家との関係性が描かれていることがわかる。つまり、物語の世界観が〈一期〉に比べて開放的なのである。

その後、エド（最初はアル）たちは、セントラルの地下でホムンクルスたちが「お父様」と呼ぶ存在に遭遇する。彼の姿は、兄弟が幼い頃に旅立った父、ホーエンハイムと瓜二つの姿をしていた。兄弟は戦いを挑むが、「お父様」の前では彼らの錬金術が全く無効化されてしまう。

マスタングもブラッドレイがホムンクルスである可能性をつかむが、さらに驚くべき事実遭遇する。すでに述べたようにブラッドレイ以下、主立った軍の将校たちは、全て「お父様」に与しており、「賢者の石」を用いた「不死の軍団」の創出を策謀していたのである。そのため、マスタングは部下の全てを他所に配置換えされ、とりわけホークアイは大総統付きという実質的な人質にとられることになる。同様にエルリック兄弟も軍の監視下におかれる。自分たちの行動がウィンリィの身に危険が迫ることを示唆されて、軍とホムンクルスに従わざるをえなかった。ただ「お父様」たちも、彼らをきたるべき日の「人柱」に用いるために生かしておく必要があった。兄弟は、ホムンクルスや「お父様」に対抗するために、彼らにも無効化されなかった錬丹術の可能性を求めることになる。

この錬丹術を知るシンの王女、メイ・チャンを追って、兄弟は北の大国ドラクマと国境を接するブリッグズ要塞へと向かう。そこにはアームストロングの姉、オリヴィエを初めとする軍の精鋭が守りにあっていた。だが、ホムンクルスのスロウスが、偶然、そこに現れたことで、国土に張り巡らされた練成陣に気付くことになる。それは「お父様」がホムンクルスを使って企てていた、「約束の日」に連なる陰謀を示すものだった。彼らは、イシュヴァール内乱をはじめとした大規模な流血事件を起こして、「練成陣」の要衝に「血の紋」を標していた。その策謀は、アメストリスの建国の時点から始まっていた。実はアメストリス自体が、「お父様」が自らの野望を実行するために作り出した国家だったのである。

彼は周到にもアメストリスの地下の各所に「賢者の石」を配置していた。そもそも錬金術では、術式の発動に地殻エネルギーが利用されている。ところが、その術式には、「お父様」が地下に張り巡らした「賢者の石」が介在していた。そのため「お父様」が術式に変更を加えると、錬金術師たちの技は作用しなくなるのである。これらの謎は、スカーの兄が残したノートの解説を通して明らかにされていく。ただこの〈二期〉においても、錬金術に潜む闇、等価交換に潜む欺瞞が示唆されていることには注意しておきたい。

物語の終盤では、押し上げられた外延が、一気にその内側に向かって収斂していく。陰謀に気づいたオリヴィエはレイブン中将を誅殺し、セントラルに向かう。彼女は、虎穴に入ることで虎子を得ようとした。一方、マスタングもグラマン中将と連携し、決起の時を伺っていた。エドたちもホーエンハイムと合流し、「お父様」の住まうセントラルへの侵入を準備していた。

そして、「約束の日」はやってくる。それは、アメストリスの国土を覆う皆既日蝕の日には他ならない。日蝕を用いて練成陣を完成させ、地球というシステムの「真理の扉」に蓄えられた莫大なエネルギーと情報を取り込むことが、「お父様」のねらいだったのである。それは自らが「神」となることに等しいことであった。

オリヴィエは、密かに生家の邸宅に運びこんでいた重火器を用いて、セントラル本部を急襲させる。また、グラマンたちはセントラルに向かう大総統の列車を破壊して彼の暗殺を執行する。さらに「人柱」の候補であるエルリック兄弟、イズミ、そしてマスタング、さらには、ホーエンハイムが「お父様」の野望を阻止しようとセントラルの地下に集った。「人柱」は、マスタングをのぞいて「真理の扉」を開いた術師たちである。

しかし、ホムンクルスの生き残りであるエンヴィー、スロウス、プライドが彼らの行く手を阻む。ラースも暗殺されることなく、セントラルに帰還した。彼はブリッグズや「お父様」に反旗を翻していたグリードたちと戦う。アームストロング姉弟は、スロウスと死闘を演じる。一方、マスタングは、プライドの手によって強制的に人体練成をおこなわれる。それは「人柱」の資格をえるものだったが、その代償として彼は視覚を失う。

エドたちも「お父様」と戦うが、その力の差は歴然としていた。皆既日蝕がはじまるなかで、ついに「扉」は開かれる。国土練成陣が発動し、(練成陣の中心部のごく一部をのぞいて)国民全ての魂が「賢者の石」に錬成されてしまう。同時に地球の「真理の扉」は開かれ、ホムンクルスはその膨大な力と情報をつかみ取ることに成功する。力を得た「お父様」は、より若い容姿を獲得し、エドとそっくりな姿であられる。彼は新たに手にした力で、手の平で核融合をおこして、擬似太陽を作りだすことさえできるようになっていた。

全てが「お父様」の思惑通りにはこんだかのようにみえた。だがその時、別の練成陣が作動する。ホーエンハイムは、ホムンクルスに対抗するために、自らの体内の「賢者の石」(かつてのクセルクセルの民の魂の結晶)を国内の各地に配置していた。それが、国土を覆う月の影の円によって作動し、「お父様」に集約されていた人びとの魂を解放して、元の肉体へ戻るように作用した。「お父様」は、内に蓄えた膨大なエネルギーを抑えることが困難になる。

さらにもう一つ別の練成陣が作動する。それは、スカーの兄が残していた「逆転の練成陣」

である。スカーの兄は、アメストリスの錬金術に地殻エネルギーとは異なる力が作用していることに気づいていた。彼は、練丹術を用いて練成陣を上書きし、地殻エネルギーを十全に使うことができる術式を創り上げた。スカーたちはそれをもとに、「お父様」が張り巡らした「賢者の石」を逆手に利用して、自らの術に還流させる練成陣の作動に成功する。こうして、立場は一気に逆転する。全ての者が、「お父様」に総攻撃をかける。もちろん、犠牲もあった。アルは、戦いで傷ついたエドを助けるために、自らの魂を扉の向こうへ返した。グリードは「お父様」を内側から倒そうとして、故意に吸収されるが消滅してしまう。だが、「お父様」の体内の「賢者の石」は枯渇し、エドの渾身の一撃が、彼を粉碎する。ついに「お父様」は倒されたのである。

戦いの後、エドは最後の錬成を行う。彼は扉の向こうにいる「真理」に対して、自らが経験し、体得してきた知識を代価として、弟のアルを人体錬成することに成功する。こうして国家の改革は遂行され、兄弟は身体を取り戻す。物語は大団円のうちに幕を閉じた。

4 影・グレートマザー・エディプス複合

4-1 反復される影

これまで、“ハガレン”のふたつのシリーズの概要を示してきた。この節ではアニメの〈一期〉の構造について、検証することからはじめたい。〈一期〉の際立った特徴は、反復的な構造をもつエピソードの重なりと主人公が対峙する「敵」の特質である。

まず、前者について考えていく。〈一期〉では、同じテーマを描くエピソードが反復的に現れている。その要因の一つには、すでに言及したように原作にアニメが追いつき、追い越してしまったための迂回路として創作された側面もある。だが、事情はどうかあれ、それらのエピソードが物語に与えた影響は大きいと言わねばならない。しかも、この反復される物語は、主人公であるエルリック兄弟たちの旅のテーマと必ずどこかで重なり合っている。このような反復構造は、聖書や日本書紀と同じような神話の構造を想起させるとともに、そこに表出する兄弟の「影」が繰り返し描かれる点で注目されねばならない。

「影」ないしシャドウとは、ユング派の分析心理学において中核的な「元型」の一つである。そもそも、元型（アーキタイプ）とは、人々の深層の無意識レベルで共有されている、人格を方向づける鋳型のようなものと位置づけられる。ユングによれば元型自体は、「間接的にしか意識化することはできないが、意識の内容にはっきりした形式を与えている」[ユング 1999 13] という。それらは全ての人の無意識下に刻印されており、元型自体を認識

することはできない。だが、元型の作用によって様々なイメージが夢などに浮上するとともに、各民族が伝える神話や伝説などにも反映するとされている。

そのなかで「影」は、人間が日常的な性格の「裏面」を示すものとされる。それは、人が日常生活では無意識下に抑圧しているもう一人の自分であり、日常的な人格とは反対の性格を現すものである。影は表層の意識とは逆の性質を持つ一方で、表裏一体の存在でもある。それは、ちょうどドッベルゲンガーのように、自分とそっくりなもう一人の自分として現れるかもしれない [河合 1987]。

すでに述べたようにショウ・タッカーによる娘のキメラ化のエピソードは、錬金術師としてのエドたちの影を告発するものである。彼らはともに自らの肉親に対して禁忌とされる錬成を行った。ただし両者が志向するものと、そこで持たされた結果は大きく異なる。エドたちは人体錬成に失敗し、自らの身体を喪失する。しかも彼らは失った母親を取り戻そうとして、母親とは異なる存在しか与えられない。タッカーは錬成（キメラの合成）に成功することで、国家錬金術師の資格をえることになる。だが、その結果、彼は自らの手で、それまで存在していた妻や娘を喪失することになる。

我が娘を手にかけてタッカーをエドが糾弾すると、彼は「同じだよ君も私も!!」叫んだうえで、次のように言い放つ。「目の前に可能性があったから試した！たとえそれが禁忌であるとは知っていても」 [II 4, FA2 34-35]⁵。それに対してエドたちは、積極的に否定する論理をもたない。それは、彼らが異なった方向性を持つにもかかわらず、犯した禁忌のレベルにおいて、コインの裏表を現しているからである。このような主人公の影を告発する——あるいは影として振る舞うキャラクターは、繰り返しこの物語で登場することになる。

〈一期〉の11, 12話「砂礫の大地」では、エルリック兄弟の名を騙って地主をパトロンにつけ、「賢者の石」を錬成しようとするトリングム兄弟が登場する。彼らは行方の知れない父の研究を継承して、「赤い石」(〈一期〉では賢者の石の未完成品として頻繁に登場する)を生成する研究を行っていた。だが、「赤い石」を錬成する過程で生じた鉱毒のために、町には病が蔓延していた。名を騙っただけでなく、錬金術師の父を持ち、自らも「賢

⁵ 〈一期〉では、エドに詰め寄られたタッカーは「キメラを作る理由などない。目の前に可能性があったからそれを試した。人の言葉を理解するキメラ、それを創ってみたかっただけさ。禁忌とは知ってはいても、人の錬成を試さずにはおれなかった。君も私も同じだよ」 [I 7] と語っている。科白は異なるが、語られる内容の大枠に変化はない。

者の石」の研究を行っている点で、この兄弟たちは明らかにエルリック兄弟の影である⁶。

そして、スカーとその兄とのエピソードもまた、エルリック兄弟の「影」としての役割を担うものである。原作、ならびに〈二期〉においても、スカー兄弟の過去のエピソードは描かれている。しかし、〈一期〉でのスカー兄弟のつながりとその因縁は、エルリック兄弟の影としての側面が強調されている。かつてスカーの兄には恋人がいたが、彼女はイシュヴァールの内戦の最中に病死してしまう。スカーの兄は、彼女を救うために禁忌とされていた人体錬成をおこなう。さらにスカー自身も、兄の恋人を密かに慕っていたことが後に明らかにされる⁷。一人の女性への思慕、人体錬成の実施といった共通した背景が、二組の兄弟の間に刻印される。しかし、その一方で、スカーの兄弟は錬金術を通して兄を失い、残された弟は破壊と復讐のために術を用いることになる。他方で、エルリック兄弟は、錬金術で弟の魂を取り戻し、身体を取り戻す（再創造）ために術を用いることになる。両者の関係を端的に示す言葉が、次のような会話のなかに現れる。

スカー：俺は兄を憎んだ。イシュバラの教えに背き、錬金術を学び、俺を生かすためにあの腕をくれたと知ってはいても、それでも憎むしかなかった。エルリック兄弟は互いが互いのために生きている。

ラスト：ええ。

スカー：兄は弟を、弟は兄を愛している。俺も言いたかった。兄さんに愛していると。

ラスト：だから、お兄さんがしてくれたことをあの弟君にするのね [I 42]。

⁶ この物語の終盤でパトロンの大地主に捕えられたトリングム兄弟にエドが語ることは示唆的である。彼は、「赤い水や賢者の石に頼ってちゃ、幸せなんか手に入らないんだ」と言い放っている。物語の反復構造が、物語の結末までを予見させる科白を主人公に語らせているともいえるだろう。もっとも、このオリジナルのエピソードは金山の盛衰と賢者の石の関係性など、本来の物語のエピソードに対して不整合も多いのは否めない事実である。

⁷ 35話の「患者の再会」では、ホームクルス、ラストから錬金術の手ほどきをうけた錬金術師の青年、ルジョンが登場する。彼の村は、化石病という原因不明の病が蔓延していた。彼は錬金術で病気を治そうとするが、うまくいかない。そこにたまたま村を訪れたラストから錬金術の手ほどきを受け、「赤い石」を作って、病気を治すべを伝授する。病気は一端取まるものの「赤い石」では完治せず、ルジョンは「賢者の石」を求めて村を離れることになる。ホームクルスたちは、情報を小出しにすることで、人々が自らの意志で「賢者の石」を錬成するように仕向けていたのである。

しかし、再会したラストは、ルジョンが抱く彼女への恋心に戸惑い、自らのなかに封印された記憶に脅える。結果、彼女はルジョンを殺害することになる。青年の思いは、砕かれ、村は石化の病によって全滅してしまう。ただ、この青年とラストの擬似的な恋愛関係は、後に彼女自身が錬金術でイシュヴァールを救おうとしていたスカーの兄の恋人であったことと響き合うエピソードとなっていく。

この場面は、スカーがリオールで「賢者の石」を錬成する直前、かつて兄の恋人であり、スカー自身の思い人でもあったラストと交わした会話である。ここでスカーは、自らの兄弟とエルリック兄弟を重ねあわせる。自分たちに欠けているものを補いあう存在として、エルリック兄弟を羨望している。ライバルの視線を通すことで、兄弟の絆の深さが確認されるとともに、スカーの影としての側面もあらわになっている。

さらに決定的な点は、〈一期〉ではこのスカーが、兄弟が探し求めた「賢者の石」を錬成したことである。兄弟がその機会を持ちながら逡巡した「賢者の石」の錬成は、彼らの影であるスカーによって遂行されたわけである。それは、影がトリックスターとしての一面も持ち合わせているからである。トリックスターは「策略にとみ、変幻自在であり、破壊と建設の両面を有している」[河合 1977 101]とされる。まさにスカーは、イシュヴァールという国家の周縁から現れて、破壊と創造を兄弟にもたらしていったわけである。

このような影の登場とエピソードの反復は、〈一期〉に重要な効果を与えている。その一つは、藤津亮太が指摘するように、物語の構成と演出上の効果をねらったものとも言える。それらは長期にわたる物語の放映において、「物語が大きくどの方向を向いているか」を視聴者に提示する役割を担っている[藤津 2010 175]。ただ、〈一期〉における反復構造は、主人公たちの内面をより深くえぐり出しているようにみえる。反復される影による告発は、主人公たちが自らの罪にいかに関われ続けているかを指し示す。そのことは、次節で述べる「母」からの自立の困難さを傍証するものともなるだろう。さらに構造的な反復は、物語が進行していくなかで明らかになる個々のキャラクターの行動原理の曖昧さや矛盾といったものを、解消しないけれども、別レベルに変換しているともいえる。”ハガレン”の〈一期〉は、物語の内部に抱え込んだ矛盾や対立を反復し、最終的にエルリック兄弟のそれに収斂させていくことで、神話的な物語空間を作り出したとも言えるだろう。

4-2 「母」なるものとの葛藤

このような反復構造とともに、〈一期〉を際立たせているもう一つの特徴は、兄弟が対峙する敵の位置づけである。〈一期〉が提示した物語のフレームは、女性、あるいは「母」なるものによる子供の抑圧とそこからの「自立」が描かれている。よって彼らの「父」、あるいは社会や国家的なるものとの対峙は、二次的で補足的なものとして扱われる。つまり、〈一期〉では少年たちが成長の過程で、自らのグレートマザーと向かい合う物語に主眼がおかれているともいえる。

ユングにおいて、グレートマザーは、根源的な母性を現す元型とされる。それは子どもを等しく抱擁し、包み込む一方で、彼らを容易には放さず、呑みこもうとする存在とも位

置づけされる。〈一期〉では、この後者の側面が強調されている。それが少年たちを束縛し大地へと戻そうとする存在、否定的な母性である。彼女らのなかには、原作や〈二期〉にも登場するキャラクターもいるが、その多くは、きわめて重要な点で大きな変更が行われている。おそらく、〈一期〉が〈二期〉と分岐し、全く異なった物語として展開していったのは、彼女らの存在とその位置づけが大きいと言わねばならない。

まず、否定的な母性を代表するのが、ホムンクルスたちを使役するダンテに他ならない。彼女は、最初、イズミの師匠として登場する。つまり、兄弟にとっての錬金術における「母」の更なる「母」である存在は、より普遍的な太母のイメージに近づく。ならば、術者の系譜関係において「母」の「母」(グランドマザー)たるダンテは、その初発からグレートマザーを暗示する存在だったといえるかもしれない。

ところで、彼女の物語のなかでの変容は、ユングが神話のなかのグレートマザーのイメージとして見いだしたギリシア神話の女神、ペルセポネーの姿を彷彿とさせるものがある[ユング 1999]。秋山さと子によるとペルセポネーには異なった三重の性格があるという。まず彼女は、別名コレー(処女)ともよばれ「農耕を司る大女神」である。その姿は、青い麦の穂で象徴される。次に成熟した女神であるペルセポネーは、実った麦の穂で現される。さらに「冥界の暗い母といわれ、月神でもあるヘカター」が彼女の三番目の姿であり、「刈り入れが終わった後の麦の穂」[秋山 1982 76]で現される。

つまり、この女神は女性の人生の三つの段階、処女であり、成熟した母であり、そして、冥界を想起させる老婆の相も示しうるわけである。

すでに述べたようにダンテは、最初、温和な「老婆」の姿で現れる。次に彼女は、自らに弟子入りしたライラの姿をとる。まるで修道女のような出で立ちで、錬金術の習得に励んでいた彼女の姿は、「処女」性を暗示している。さらに彼女は自分の身体が腐敗してきたために、新たな肉体であるロゼをもとめる。彼女はすでに子どもを授かっており、成熟した「母」の容姿を身にまとっている。ダンテがロゼの肉体を乗っ取ることはなかったものの、彼女の意志の自由を奪って意のままにしており、両者のイメージは重ね合わされる。このように多様な側面をみせることによってダンテは、その否定的な女神、グレートマザーとしての側面を強く印象づけている。

ちなみに、イズミ・カーティスの位置づけも〈一期〉ではやや異なった性格が付与されることになる。すでに記したように彼女は、エルリック兄弟の錬金術の師匠であり、多くの指針と示唆を与える存在である。また、彼らと同じ罪を背負った存在として、兄弟のよき理解者でもある。彼女は傷ついた兄弟を抱擁して、母性をかいま見せる場面もあった。しかし、〈一期〉では、彼女が錬成に失敗した子どもがラースとして登場してくることで、

その立ち位置は微妙にずれてくる。自らが生み出した「子」であり、許されない存在であるラースに対して、イズミは逡巡し、葛藤する。彼女の母性はラースに固着し、兄弟に注がれるべき彼女の母性は、相対的に薄れることになる。

実際、前述の師弟関係を踏まえれば、イズミは、自らを賭してでも兄弟を助けるためにダンテと対峙したはずである。それは彼女にとっての真の成長物語にもなりえただろうし、「子」を守るべき「母」ならば、そのような描写がありうるはずであった。けれども、最後のエピソードで彼女は、物語の後景に引き下がってしまっている。だが、それは兄弟が成長したことによって自らが身を引いたといったものではない。

これは後日談であるが、映画版『シャンバラを征く者』でイズミは、すでにこの世の人では亡くなっている。しかも物語の後半、ラースが戦いのなかで命を落としたあとのシーンで、光に包まれたイズミは幼い（人間に戻った？）ラースを抱きとめ、消えていく。彼女はラースの母としての位置を得ることで、兄弟たちの物語から距離を置いていった過程がよくわかるだろう。

もう一人、注視せざるをえない存在が登場する。いうまでもなく、ホムンクルスの一人、スロウスである。すでに述べたように彼女は、兄弟が人体錬成によって生み出した存在であり、在りし日の母トリシャと同じ生き写しの姿をしている。彼女にはトリシャだった頃の記憶が残されているものの、「彼女」の魂は錬成されてはいなかった。彼女は人ならぬ姿で錬成されたが、ダンテが彼女に「赤い石」を与えたことで、ホムンクルスとしての容姿と能力を獲得していた。後にスロウスは、ジュリエット・ダグラスという偽名を使い、大総統ブラッドレイの補佐を務めることになる。ホムンクルスとしては、液体に変化できる能力を用いて、人々を飲み込み窒息させることができた。そのため、物理的な攻撃が意味をなさない存在でもある。エドたちは、自らが生み出した出来損ないの「母」と対峙しなければならない。

スロウス自身は、自らが「母」だったときの記憶を部分的に持っていることに苦しんでいた。トリシャの魂をもたない彼女は、たとえ容姿が似ていて記憶を持っていても、兄弟の母にはなりえない。彼女はエドたちを否定し、殺害することによって自らの存在を肯定しようとする。「子」を飲みこもうとする欲望の奔流と化したスロウスは、その能力とも相俟って、あたかもネガティブな羊水のようにさえみえる。

このような否定的な「母」との戦いこそが、この物語の後半のテーマとなっている。しかもそれは、非常に間合いのつかみにくい、デリケートな戦いである。スロウスとの戦いの場合、エドは最期に、彼女を揮発性の高いエーテルに錬成し直すことで決着をつける。スロウスは、あたかも真の母親のような言葉を残して天に帰っていく。それは、「昇天」

と呼ぶにふさわしい描写である。戦闘というよりも鎮魂であり、別離のシンボリックな表現に見える。

最後のダンテ＝ライラとの戦いでは、直接的な戦闘はほとんどない。実際にエドと戦うのは、エンヴィーやグラトニーである。エドは、腹違いの兄であるエンヴィーに一度は殺されるものの、アルの「賢者の石」の力で甦る。彼は再びアルを助けるために自らの命を代価としてアルを錬成し直す。兄弟は、スカーが語った通りお互いを犠牲にして支えあおうとする。その兄弟に対して、ダンテが直接手を下すことはない。しかも彼女は「賢者の石」が失われると、あっさりと兄弟に見切りをつける。その後、彼女は凶暴化したグラトニーに襲われて以後の消息は不明となる。

おそらくここで重要な点は、ダンテとの戦いが先延ばしされ、直接的な戦いがみられない、という点である。ダンテ自身が仕掛けなかったから、では理由にならない。ホムンクルスをしてアルを拘束し、エドに攻撃を加えていたのは、全てダンテの指示によるものである。「子」が成長に際して「母」なる存在、とりわけ、「子」を飲み込もうとする否定的な母性との対決は避けられない。しかし、この物語では、その対決は明示的なものにはなりにくく、戦いそのものが延引されてしまう。

このような母との戦いが曖昧なまま棚上げにされた結果、兄弟たちの真の成長が〈一期〉で描かれることはない。その端的な徴候が、ヒロインとしてのウィンリィの凋落である。〈一期〉の終盤、明らかにウィンリィは、物語の後景に退いてしまっている。そこでエドが守ろうとするのは、ロゼとその幼子である。すでに述べたようにロゼは、幼子を慈しむ理想的な「母」を指し示す。エドは、ウィンリィという自らが成長することで手にしえたかもしれない異性ではなく、「母」の表象を色濃く示すロゼを守ろうとした。最後の戦いでは、否定的な母性と肯定的な母性の狭間に立たされたエドの姿だけが前景化している。

河合隼雄によると試練となる敵を打ち倒したあと、「英雄はしばしば怪物に捕えられていた女性を解放し、それと結婚する」という。このことは、「自らを世界から切り離すことによって自立性を獲得した自我が、ここに一人の女性を仲介として、世界と新しい関係を結ぶことを意味している」[河合 1976 143] という。けれども、エドは、相反する母性を前にして右往左往したままである。この物語において主人公たちは通常の意味での「自立」や「成長」を遂げることなく、物語は閉じられる。

4-3 王道しての「父殺し」

それでは、〈二期〉、あるいは原作の物語展開はいかなるものだろうか。

大雑把にまとめるとこの〈二期〉は、〈一期〉と非常に対照的な展開を示しており、人

物像から物語の構造まで、ほぼ父と子を基軸とする物語と解釈しうる作品となっている。簡単に言うとエディプス^{コンプレックス}複合として、兄弟や他のキャラクターの行動原理を捉えることが可能なのである。いうまでもなくエディプスコンプレックスとは、精神分析を創始したフロイトによって提唱された概念である。彼は、ギリシア神話のエディプス（オイディプス）の悲劇に投影しながら、父と子、そして母との関係を説明する。

神話のなかでエディプスは知らずして実の父を殺し、実の母を妻に娶ることになる。フロイトはこのギリシア悲劇に、人の無意識に抑圧されたリビドーの奔流をみてとった。人はその生涯の初まりにおいて、もっとも至福の空間を「母」と共有している。「母」と同一化し、抱かれる存在として我々は充足していた。しかし、人が人として成長するということは、その「母」から引き剥がされ、社会の一員として主体化することを意味する。そのような社会的な立場を強いる存在こそ、「父」にはほからならない。同時に「父」は、「母」を独占する存在でもある。そのため、人は、潜在的に「母」なるものへと回帰すること、「母」と同一化することを欲し、それを遮る障壁である「父」を憎むことになる。

もちろん、そのような原初の^{リビドー}欲動は、社会化していくなかで封じられ、否定されねばならない。そのため社会化の過程で人は、自らの本源的な欲望を抑圧し、なんらかの形で昇華する必要がある。同時に人は、「父」を乗り越え、象徴的に「殺す」ことによって、真に社会化を果たしてゆくことになる。母への回帰とそれを阻む父への殺意、その抑圧による超自我の形成、社会的な規範、国家的な規律の内在化は、「父」によってもたらされるわけである。

フロイトがギリシア神話にちなんで命名したことでわかるように、エディプスコンプレックスの物語は、多くの神話や伝説のなかに示されてきた。さらには、近代以後の小説や映画、マンガ、アニメなどにおいても顕著にみることができる。『スターウォーズ』におけるダース・ベイダーとルーク・スカイウォーカーのエピソードなどはその端的な事例である。日本のアニメで言えば、『銀河鉄道 999』の劇場版にも全く同じ展開がみられる。

この議論を踏まえて、先の〈二期〉を見直すと、この作品が、主人公を中心に幾重にも重なったエディプスコンプレックスを形成していることがわかる。すでに大田俊寛も“ハガレン”の物語を「古今東西の諸神話にみられる「原父殺害」のモチーフを反復している」[大田 2010 96]と位置づけている⁸。

⁸ “ハガレン”の原作についても、「王道の少年マンガ」であるという説明がなされることが少なくないという。その主な理由としては、「苦い過去と向き合い、仲間との絆を築き、憎しみを乗り越え、父親との関係を結び直し、数々の戦いをくぐり抜けて、着実に、前に進んでいく」主人公たちの「骨太の成長物語」が描かれているからである [岩下 2010 179]。

二人の主人公、エドとアルにとって最後の敵であるホムンクルスは、ネガティブな「父」に他ならない。物語の中盤まで両者は、意図的に重ね合わせて描かれている。そのために物語が完結していない時点で出版された解説本などでは、ホーエンハイムと「お父様」が、同一か否かが詳しく検証されたりもしている〔中央ウロボロス研究所編 2004〕⁹。

結果的に彼らは別の存在であり、しかも激しく敵対する関係にあったこともわかっている。しかし、両者には容姿だけでなく、血のつながりから「賢者の石」としての属性まで含めて、一對の関係であることは間違いない。兄弟は、ホーエンハイムという「くそ親父」——エドが物語の最後でホーエンハイムに対して叫んだ言葉——の助力のもとに国家を統べる「お父様」と対峙し、乗り越えねばならない。

主人公以外にも、他の登場人物たちもそれぞれの意志のもとに国家やそれを支配する「父」と対峙することになる。しかもそのような展開は、キャラクターの内的な性格というよりも彼（女）らがよってたつ社会的ポジションからくる必然的な帰結として描かれている。彼（女）らは、親族（ドメスティック）と国家（パブリック）の両面において、自らが家長であることを自覚し、その責任と義務のもとに行動している、ということである。家長であること、つまり「父」を継承することを自らに課した存在は、当然、「父」と対峙しなければならない。

例えば、「ブリッグズの北壁」、「水の女王」の異名を持つオリヴィエがいる。彼女は、おそらく通常の男勝りでは済まされない。彼女は、「北」に自らの居城を築きあげただけでない。生家であるセントラルに戻っても、父母を体よく海外に避難させ、自らの家を自由に取り仕切る。あげくに自分に何か起きた場合には、弟ではなくマスタングにその権利を委譲するとまで言い放っている。彼女は、家系の継承者を自認しており、実質的な家長として振舞っているわけである。

オリヴィエは、国家の中枢の陰謀を知ると、自らがセントラルに乗り込むという戦法にうってでる。彼女は、セントラルで大総統キング・ブラッドレイと対峙し、堂々と中心の陥落を狙うのである。彼女の行く先は、当然のように、ブラッドレイの先にある。「お父様」を倒すために、彼女もまた、セントラルへと導かれた存在である。

⁹ また、荒川自身によれば、連載の初期の頃のファンからの手紙に「「お父さん（ホーエンハイム）がラスボスなんでしょ？」って、落ちがわかったから最期まで読まなくていいやという感想がきた」と語られている〔荒川 2010 122〕。もちろん、このような性急な読者のために、物語の設定が複雑化したわけではないことはいまでもない。本論で論じたような複層的な形で「父」が描かれている意味についても、もっと詳細な検証が必要なのだろう。

シンから密入国したリン・ヤオはさらに明快な立場にある。彼は自らを皇帝になる男と位置づけ、その目的のために「賢者の石」を手に入れようとしていた。その真の目的は、シンにおけるヤオ族の地位を引き上げることに他ならない。リンは、自らの「子」たる民のために「父」を乗り越える試練を背負って、この物語に関与してくる。しかも彼は、「お父様」とエドたちが戦った場で、「賢者の石」を手に入れるためにホムクルスのグリードと同一化する。それは、彼の行動原理においても一貫性をもつものであった。ただ物語の展開においても、重要な効果をもたらしている。結果として彼は、自ら「お父様」の「子」となることで、積極的に「父」と対峙するべき位置を獲得することになったわけである。

このようなキャラクターが勢ぞろいするなかで、物語の柱の一人、マスタングについても、付加的な描写が施されている。〈二期〉では、彼が「焔」の錬金術師となった端緒として、父系的な師からの継承が示されている。しかもその継承は、やや不安定で変則的なものであった。練成陣の術式は師自身から教授はされず、師の死後に娘のリザ・ホークアイの背中に刻まれた術式から学びとったものであった。その意味で彼はまだ、本当に「父」を乗り越えていなかったとも言える。

また彼は、その力を国家や国民のために用いることを望んだが、その野望は、とうの国家によって裏切られる。彼は親友のヒューズを失い、部下たちを奪い取られていった。それを奪ったのは、国家を統べる「お父様」である。自らが目指す大統領の先にいる存在、父権の象徴とも言うべき存在である。彼もまた国家を統べるべく、「お父様」と対峙する必要があった。

すでに述べたように物語の終盤では、「真理の扉」をこじ開けた「お父様」に対して、全てのキャラクターが結集し、彼らはずいに「父」を乗り越えた。

物語の後日談の描写では、彼らの成長がさりげなく描かれている。オリヴィエは北方司令部を任せられ、マスタングは東方司令部でイシュヴァールの復興政策に尽力することになる。やがて彼らは、国家の新たな礎となる役割、すなわち、国家の「家長」の役割を継承することになるだろう。リンは戦いのなかで手にした「賢者の石」によって、シンの皇帝への道を歩んだことが示される。彼は自民族だけでなく、全ての民族を背負い、帝国の「父」となっていく。

そして、兄弟にとっても大きな結末が待っている。自らの身体を取り戻したアルは、シンで錬丹術を学ぶために新たな旅に出る。彼らは等価交換を超えて、自分に与えられたものに余剰を加えてお返しするという、逆転の資本主義ともいえる発想を実証することを目指す。同じくエドも旅に出ることになるが、出発の直前で彼は、ヒロインであるウィンリィに不器用な愛の告白を行う。「等価交換だ、俺の人生半分やるからお前の人生半分く

れ」と。彼女は、エドの言葉に「等価交換の法則と違ってバッカじゃないの？」と呆れはてる。いきり立つエドにウィンリィは「ほんとバカね、半分どころか全部あげるわよ」[II 64, FA27 184-186]と彼の愛を受け入れる。彼女は、兄弟が実証したいと考えていた「等価交換を否定する新しい法則」をあっさりと実践してみせたのである。

このように〈二期〉のウィンリィは、正当なるヒロインの座を獲得した。エンディングのスナップには、エドとウィンリィが家庭を築き、息子たちに囲まれているショットも示される。彼らは、成長の証しとして自らの身体を取り戻し、新たな家族を創りだしていったのである。

5 相補的構造が現すもの

5-1 日本における「母性原理」

これまで、ふたつの“ハガレン”の概要とその物語構造についてみてきた。ここで明らかになったように、このふたつの物語は、きわめて相補的な構造を持っている。つまり、〈一期〉の物語が「母性原理」、あるいは母と子の関係性を軸に展開しているのに対して、〈二期〉は、「父性原理」、父と子の関係性を軸として展開しているのである。「母性原理」の強さは、主人公達の成長を阻害するものである。それは最終的な戦いを回避し、物語の帰結もまた曖昧なものにしてしまっている。それに対して「父性原理」のもとに展開してきた〈二期〉は、登場人物たちの成長物語として完結している。

本稿では、両者の特質をユングとフロイトの位置づけに沿って言及しておいた。ただそれは、両者の位置づけの理論的な優劣をつけるためではない¹⁰。むしろ、この二人の研究者の重点の置き方に対応するような描き方が、ふたつの“ハガレン”に表出されているこ

¹⁰ 実際、“ハガレン”の道具立ては、驚くほどにユング的なものに満ちている。何よりも錬金術は、神話や曼荼羅などとともにユングにとって、無意識への道案内の地図でもあった。まるで曼荼羅を思わせる錬成陣や物語の鍵となる「賢者の石」は、全てユングが、彼の著書のなかで言及しているものばかりである。また、あのセントラルの地下に鎮座する「お父様」は、ユングが4歳の時にみたという地下のファルスの夢を体現するものかもしれない[ユング1972, 河合1977, 秋山1982]。

また、より重要な点として、「神」を取り込んだホームンクルスは、その力を得て、若い頃のホーエンハイム、そして、エドワードそっくりな姿になっている。つまり、クライマックスにおいてエドは、自らの影と対決しているようにも見えるのである。しかし、繰り返すが問題はそこではない。道具立てを用いながら、そこに表出されたのは、やはり、父親を倒し、そして自らが新たな家族の長となる「物語の王道」であったことは強調されねばならない。

とを強調しておきたかったのである。やや議論を先走ってしまうなら、このような相補的な構造が一つの物語に共有していることが、きわめて現代日本を特徴づける現象のようにみえるということである。この問題を説明するために、いくつかの補助線を挿入する必要がある。

日本の社会における「母」の位置づけが西洋のそれとは大きく異なっている。戦後、心理学を初めとする多くの研究者たちが、そのように論じてきた。例えば『甘えの構造』で土居健郎は、母子間に端を発する日本的な関係を「甘え」というキーワードのもとに論じている。

「甘え」とは他人の存在をあてにして、他人に依存しようという欲求である。本来、幼児や子供のときに母親に対する依存が強い傾向は、普遍的な文化にみられる。しかし、日本人には、「甘え」という言葉に包摂される他者に対する依存の態度を、成人後も持ち続けるところに特徴がある。そのうえで土居は、「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする」と捉え、次のように語る。

むしろ甘えなくしてはそもそも母子関係の成立が不可能であり、母子関係の成立なくしては幼児は成長することもできないであろう。さらに成人した後も、新たに人間関係が結ばれる際には少なくともその端緒において必ず甘えが発動しているといえる。その意味で甘えは人間の健康な精神生活に欠くべからざる役割を果たしていることになる [土居 1971 82 - 83]。

母と子の心理的分離がなかなか進まないことの裏面として土居は、「甘え」の肯定的な側面を示している。それは、日本においては「人間の健康な精神生活に欠くべからざる役割」を果たすのだという。

また、小此木啓吾も、「阿闍世コプレックス」を援用しながら、日本における「母性原理」を強調している。

つまり、日本人の阿闍世コプレックスは、一つの社会的規制原理としてそれが働く場合には、欧米の『罪に対してそれを罰し、償わせる』という父性原理と対称的な『罪をゆるし、ゆるされる』という母性原理の形であらわれる。まさにそれは、自らに背き、逆らい、恨む相手をゆるし、そのゆるしを通してお互いの一体感を回復しようとする、日本的な母の心理を原型としている [小此木 1982 23 - 24]。

ちなみに「阿闍世コンプレックス」とは、仏典を典拠として、母-子関係における相克と葛藤をめぐる仮説である。母親は子どもの出生について恐怖を抱くが、子も母に対して怨みを抱くことになる。この仮説は、当初、古澤平作によって戦前の段階で提唱されていた。古澤の仮説を再解釈しなおした小此木の議論では、上記のように大きな変更点がみられる。小此木は、この「阿闍世コンプレックス」を欧米の「父性原理」と対比的に捉える。欧米では「罪に対してそれを罰し、償わせる」ことを原則とするのに対して、日本では、「罪を許し、ゆるされる」という「母性原理」を特徴とする。母との原初の同一性から、その裏切りと葛藤という段階を経て、「ゆるしを通してお互いの一体感を回復しようとする段階が想定されるのである。

さらにユング派の心理学者、河合隼雄も日本の父性の弱さを指摘し、母と子とのつながりの強さを強調した事例を紹介している。彼は「現代日本の社会情勢の多くの混乱」が、「父性的な倫理観と母性的な倫理観の相克のなかで、一般の人々がそのいずれに準拠してよいか判断を下せぬこと」[河合 1976 12]にあるという。彼も日本の社会が西洋的な「父性原理」よりも「母性原理」に重きを置いた社会であったと考える。さらに彼は、「永遠の少年」という元型を日本社会に投影する。それは「成人することなく死に、太母の子宮のなかで再生し、少年として再びこの世に現われる」[河合 1976 21] 神話的な存在である。この「永遠の少年」の元型に同一化した者は、社会に適応することに困難を感じ、常に「未だ」の状態におかれたまま [河合 1976 22] でいるという。しかし、何らかの契機が訪れると、突然、目覚めたように活発な行動にでたり、崇高な目的に殉じようとしたりする。ただその背後で作動しているのは「太母の子宮への回帰の願いであり、その願いのままに死を迎えることもある」という。そのうえで河合は、日本の社会を「母性原理を基礎にもった「永遠の少年」型の社会」[河合 1976 24] と位置づけている。

このような社会では、子どもから大人へのイニシエーションも行われにくい。彼らは「父を求めて右往左往するが、出会うのは母ばかり」[河合 1976 26] という状態である。イニシエーションが十分に機能しない社会では、それらを精神的、儀礼的なものに昇華できずに、血なまぐさい事件を引き起こす遠因となっている。けれども河合は、「母性原理」を重視することが個人の主体化を阻害する可能性を認めつつ、それを結論とは考えない。彼は「日本人の自我の確立が未完成であることを嘆き、母殺しと父殺しの必要性を強調して筆をおくことも可能」だが、それは「筆者の実感が許さない」[河合 1976 29] という。

日本の社会は父性原理と母性原理の中間的存在ではないかと指摘しておいたが、それを「永遠の少年」などと呼んだのも、西洋的な観点に立ったからであり、そのためにむしろ、

否定的な把握の仕方をしたが、ここで観点をまったく変えれば、柔軟性のある、バランスのとれた構造と考えられはしないだろうか〔河合 1976 30〕。

河合は、まるで土居が「甘え」を肯定的に捉えるのと同じように「西洋」の鏡像としての日本社会の特質を「柔軟性のある、バランスのとれた構造」とみなしている。

以上のように心理学者たちは、しばしば、日本社会が西洋的な「父性原理」にもとづく社会とは異なり、「母性原理」を中心とする社会であると論じてきた。しかもこのような「母性原理」が、日本社会の特質として肯定的に受け止められてきたのである。

もっとも以上のような議論が、果たして本当に「日本的」であるか否かを、ここで論じるつもりはない。そもそも「日本的」であるとはどのような次元において検討されるべきか、といった問いかけについても保留しておく。しかし、これだけ多くの著名な研究者が、新聞や雑誌、一般書で言及し続けた「母性原理」の強調は、今日の日本社会に相当フィードバックされていると考えなければならない。

例えば、文化人類学者の船曳健夫は、土居の『甘えの構造』が一人歩きしたことで、「甘え一般をよしとする日本人の考え方」が大きく変化した可能性を指摘する。彼は、子どもの「自立」を促す講演会の様子を紹介しながら、そこでは、「養育」の中で、甘えの量が少なく、「自立」が多すぎる」と感じる〔船曳 2010 203〕。現代の日本では、土居の議論とは異なり、母子関係を含んだ社会問題の要因として「甘え」を否定的に捉えるようになったとも言えるだろう。

5-2 「母性原理」と「父性原理」

このような状況のなかで、改めて“ハガレン”を見直す時に、この物語がふたつに分岐し、しかもそれらが相補的な構造をとっていることに改めて注目しなければならない。

とりわけ、〈一期〉の物語は、あたかも、心理学者たちが語り続けてきた日本における「母性原理」の強さを体現するかのような物語展開を示している。半世紀に及ぶ日本のアニメーション史のなかで、このような否定的な母性を表現して話題となった作品は、あまり存在しなかった。だが、前世紀の終わり頃から、この種の物語が登場してきたことも間違いない。その顕著な事例が『エヴァンゲリオン』のテレビ版と映画版である。この作品には、エヴァンゲリオン自体とともに綾波レイ、リリスというグレートマザーが登場していた。しかもこの物語では、主人公の成長が描かれることはなく、否定的な母性であるエヴァに呑み込まれようとするなかで、右往左往するばかりである。永瀬唯は、映画版のエヴァンゲリオンについて、「神話的な「大きな物語」と、主人公碇シンジをめぐる「小さな物語」の双方

の核にある家族ロマンスにあって排除され、器官切除され、記憶を篡奪された女=母的なるものの覚醒によって物語の終幕は開かれる」[永瀬編 1997 6] と物語を予測し、的中させている。

それ以後、『涼宮ハルヒの憂鬱』などの多くのアニメーションで、否定的な母性を潜在化させた物語が登場することになる。これは、きわめて今日的な時代を特徴づけるものかもしれない。

先の引用からいえば、「母性」を自覚した日本社会が、自らを表象するものとして、このような物語を選好的に描き出したともいえるかもしれない。ただそれは、近年の母子関係が「自立」を強調することに対抗して表出されたものか。それとも「母性原理」の強さの自覚が、マーケティングを含めた外的な要請のもとに再構成されたものなのかは、ここでは問わない。

しかし、「ハガレン」では、〈二期〉という全く新たな物語が、しかも、「王道としての物語」が描きなおされていることにも注目したい。つまり、物語は、「母性原理」のもとに差延され、ループに至るだけではない。むしろ、主人公たちの「成長」と「自立」を高らかに謳いあげた物語が構築され、そこには非常に強く「父性原理」が働いていた。これは、おそらく、偶然ではない。物語は、ループ的な構造に耐えられず、線条的でイニシエーションを含みこんだ「成長」の物語を欲し、そしてそれを体現しているのである。

実は、現在、先に挙げたエヴァンゲリオンにおいてもリメイクが行われている。この特異な物語が、「成長」を表現しきるか否かは、一つの物語の表象技法への関心を超えて、今の日本の社会や文化が、どのような自己表象を選択し、提示しようとしているのかを示すものともなるだろう。

6 おわりに

これまでふたつの「ハガレン」のアニメーションの差異についてみてきた。後半の考察では、「ハガレン」以外の議論を行ったが、「ハガレン」の魅力は以上の議論にとどまるものではない。

例えば、アルやホムンクルスたちの存在を、「テクノロジーアニミズム」[アン 2010] の新たな展開過程と捉えることもできるだろう。それは、小泉義之が語るようにサイボーグとしての身体性とその終焉を巡る議論とも関連づけられるものかもしれない [小泉 2010]。

また、本論では十分に議論できなかった国家の無根拠性の問題もあげられる。とりわけ

〈二期〉では、主人公たちの「成長」の裏面には、国家的なものへの従属、馴致の過程を見てとることもできる。だが、そもそも国家の成立自体を括弧にくくった展開を示すこの物語からは、そのようなネーションへの馴致とも異なった可能性を指摘できるかもしれない。

さらに〈一期〉の平行ワールドの問題も残されている。それは、一種のループであり、またメタフィクションの形態と捉えることもできる。このようなループ的構成やその暗示は、すでに述べたエヴァやハルヒとも共通するものである。それらと「母性原理」とのつながりについても改めて検討が必要になるだろう。これらの課題を含めた議論は稿を改めておこないたい。

参考文献

- 秋山さと子 1982 『ユングの心理学』 講談社
- 荒川弘他 2010 『ユリイカ2010年12月号特集=荒川弘『鋼の錬金術師』完結記念特集』 42 (14), 青土社
- 荒川弘, 齊藤宣彦 2010 「魂を受け容れるもの—一夜漬けに始まる少年マンガの骨法」 『ユリイカ』 42 (14), 110-124
- アン・アリスン 2010 『菊とポケモン—グローバル化する日本の文化力』 実川元子訳, 新潮社
- 岩下朋世 2010 「マンガはいかにして「人間」を錬成するのか」 『ユリイカ』 42 (14), 179-189
- 太田俊寛 2010 「超人的ユートピアへの抵抗—『鋼の錬金術師』とナチズム」 『ユリイカ』 42 (14), 89-97
- 小此木啓吾 1982 『日本人の阿閼世コンプレックス』 中央公論社
- 河合隼雄 1976 『母性社会日本の病理』 中央公論社
1977 『無意識の構造』 中央公論社
1987 『影の現象学』 講談社
- 小泉義之 2010 「サイボーグ時代の終焉—錬成陣の構築式を血肉化する主体」 『ユリイカ』 42 (14), 138-143
- スーザン・ネイピア・J.
2002 『現代日本のアニメ—『AKIRA』から『千と千尋の神隠し』まで』 神山京子訳, 中央公論新社
- 中央ウロボロス研究所編
2004 『「鋼の錬金術師」解説』 三一書房
2005 『「鋼の錬金術師」解説〈パート2〉』 三一書房
- 津堅信之 2005 『アニメーション学入門』 平凡社
- 土居健郎 1971 『「甘え」の構造』 弘文堂
- 中里裕一 2004 「アニメの表現世界」 『メディア文化を読み解く技法—カルチュラル・スタディーズ・ジャパン』 阿部潔, 難波功士編, 世界思想社, 115-139
- 永瀬唯編 1997 『ターミナル・エヴァ—新世紀アニメの世紀末』 水声社
- 馬場広信 2005 「時代の“いま”を見据える『鋼の錬金術師』の倫理学」 キネマ旬報 (1434), 151-156
- 藤津亮太 2010 「二つの『鋼の錬金術師』—マンガのアニメ化の時代変遷」 『ユリイカ』 42 (14), 170-178
- 船曳健夫 2010 『「日本人論」再考』 講談社
- ユング, C. G. 1972 『ユング自伝—思い出・夢・思想 (1)』 河合隼雄他.訳, みすず書房
1973 『ユング自伝—思い出・夢・思想 (2)』 河合隼雄他.訳, みすず書房
1999 『元型論—増補改訂版』 林道義訳 紀伊之國屋書店

参考資料

- 荒川弘 2002～2010 『鋼の錬金術師』 (1)～(27) スクウェア・エニックス